

## 行事報告

## 広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業—CIS 活動報告(ダイヘン六甲事業所)

広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター 運営委員会 委員 菅哲男  
接合科学研究所 客員教授

2019年度のインバウンドCIS(カップリングインターンシップ)が、9月15日—28日の期間にダイヘン六甲事業所(神戸市)で開催されました。大阪大学の工学研究科2名、経済学研究科1名、外国語学部1名、KMUTT(モンクット王トブリ工科大学)の経営学研究科2名、工学研究科2名の計8名の学生が参加しました。接合科学研究所の橋本特任講師が、CISの全工程を引率しました。

2日間(9月16日—17日)の事前研修を阪大・接合研で行い、日本企業の経営理念やコミュニケーションの研修、実習企業の紹介、溶接知識の教育、実習テーマの検討などを行いました。

9月18日から5日間(休日を除く)の企業実習に臨みました。実習先のダイヘン六甲事業所で、会社の紹介(方針、組織、業務)、安全と品質の講習などを受けると共に、工場見学(ロボットの製造他)、工場実習(品質検査、ロボット操作、マグ溶接)やダイヘン溶接機事業部の幹部やスタッフとの面談を行いました。9月24日には、

変圧器を製造している南電器製作所(香川県多度津郡)の見学もしました。また、実習テーマ「グローバル人材育成における課題と対策」について、学生は連日一生懸命に取り組みました。なお、9月22日には、文化体験として全員で京都へ行き、親交を深めました。

最終日の9月27日に、阪大・接合研で学生はテーマの検討結果を発表しました(写真)。最終報告会には、ダイヘンの前田部長、真鍋部長、宮原課長、KMUTTのAnak学長補佐、阪大の西川教授、橋本特任講師、菅客員教授ら計23名が参加し、活発な質疑応答が行われました。前田部長からは、「グローバル人材育成のあり方」に関する熱いメッセージがありました。

学生は、ものづくり企業の現場を体験すると共に、実習テーマを通して「異文化コミュニケーション」の理解が出来ており、大変有意義な学びを得る活動でした。また、インバウンドCISは、日本人学生が自身のアイデンティティを考える良い機会ともなっているようでした。

